

港天神祭物語

天神祭の由来

玉島港が千石船でいざ
わい、港町も人家が密
集して繁栄した江戸時

代も中頃以降のことと考えられる。

今は昔、玉島港町に美濃部みののべという寺小屋師匠
がいて、勉学べんがくに勤こましむ者は菅原道真を文学の神
能筆ひょうしつの聖ひょうしつとして祀らねばならないこととして、
ある夏の夜、道真が大宰府へ流された日を偲ん
で、沖合いはるかに一舟を漕出して、船中ひそ
かに祭事を執り行つたと伝えられることにはじ
まるといふ。

この事実が基となって、港の回船問屋を中心
として盛大な祭に発展し、明治時代には大阪の
天神祭と並んで、西日本でも有名な祭であつた
といわれている。

かつては、毎年旧暦六月二十三日（新暦七月
下旬）八月上旬、羽黒神社に合祀されている和
霊宮で「宵宮祭」、翌日に菅原宮の「神幸式」、
海上渡御が行われる習わしだった。

宵宮祭は和霊宮で「和霊さまが愛する妻子と
共に「かや」の中で非業の最後を遂げた」こと
を偲んで、ひそかに行われる。

地元玉島では、かつてこの夜「かや」をつら
すに寝るといふ風習があつたといふ。

また、天神祭当日は羽黒山周辺の町内は人で
埋まり、身動きもできない人の波で、海に落ち
る人も出る程だったといふ。

花火が打ち上げられるころ、天神祭みこしの
海上渡御が始まる。

御座船は帆船二隻を横に並べて、みこしを乗
せる。注連縄しづななわを張りめぐらし幔幕を張り、赤ふ
んどし姿の船子が乗りこんで、掛声も勇ましく

槽ぎ出して行く。

かつては港内をくまなく三周して返っていたが、いつしか納涼船に乗せて一周するだけとなり、今ではみこしを自動車に乗せて、陸上渡御と変ってしまった。

戦後復活した「玉島天神祭」の名称も、昭和三十年代後半ごろから「玉島港祭」となり、最近では「玉島祭」と変化して、時の大きな流れを感じさせる。

和霊様と蚊張つらずの由来

江戸時代初期の元年間

六三〇ころ、四国宇和島藩主伊達秀宗（仙台藩主伊達政宗の子）に仕えた家臣山家公頼を祀った宇和島和霊神社の分社である。

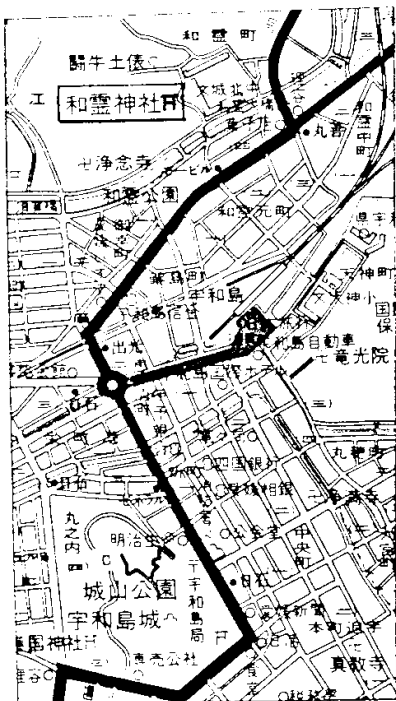
その昔、玉島港の繁栄にもなつて、玉島へ

往来した商人が伊予国宇和島に鎮座する本社から勸請したと伝えられている。

かつて玉島港町では旧暦六月二十三日の夜、和霊様の祭典がひそやかに行われ、当夜、蚊張をつらずに夜を明かすと、心願一事成就するといわれていた。

今は昔、宇和島藩に仕えた山家公頼の忠勤と藩政の刷新充実の功績は大へん大きなものがあった。

しかしそのために、奸臣大橋右膳らの憎むところとなり、元和六年（一六三〇）六月二十三日の夜半、凶徒の襲害を受けて、妻子と共に蚊張の体で、非業の最後を遂げることとなった。



ところが、公頼を襲った者どもは、翌日ことごとく急死して世を去るといふ、不思議が起つた。

それだけではなくて、さらに公頼の死後、彼の忠魂が藩主のそばを離れることなく、その神威は佞臣を倒し、また夢幻の間に出現しては、災を未然に告げるなど、数々の奇蹟を現わした。

このため藩主秀宗は公頼の忠を追慕し、小祠を建てて兎玉明神と称した。

秀宗の子、宗則に至っても神徳日にあらたかとなり、崇敬またいよいよ厚くなって、遂に京都の神祇官吉田家に請うて神社造営の許を得た。これが宇和島の和霊神社の起源であるといふ。

天神祭風景

古老が語る大正末期から昭和の初期。

夕方近くなると、玉谷山から打上げられる花火にさそわれるように、円乗院道を浴衣掛けの老若男女が陸続として下りて来て、通町へ土手町へと流れて行く。

通町では、東から来た人たちとで人波が次第に厚くなって、土手町へと渦巻いて行く。

今のように港橋は無く、中島・矢出町の海岸道路も勿論無かったころ。

土手町では、高瀬通の土手道を北からやって来た人たちでいよいよ大混雑。

新庄屋（旧パチンコ玉島会館跡現倉庫）前の荷揚場の僅な広場（現港橋派出所付近で道路と化した）も露店でふさがり、身動きもならない程の雑沓となり、そのために、大砲堂（現高橋化粧品店）と新庄屋との間の樋門水路に架けられた幅五メートル程の橋（今は無い南田肉店の老店がある付近）から、はじき出

された人が海に転落することも珍しくない有様であつた。

そして人の流れは薄井菓子店（現いぎやシヤン店）の角で二つに分れ、一つは羽黒山の東雁木へ石段から山上まで続いて境内を人の波で埋めつくし、もう一つは左折して常盤町へ流れて行き、さらに新町まで延びる。

ここはまた、阿賀崎、柏島方面からの人波でひしめき合う。

とにかく海に面した道路は人の波で大混雑し、その混雑ぶりは現在の比ではない。

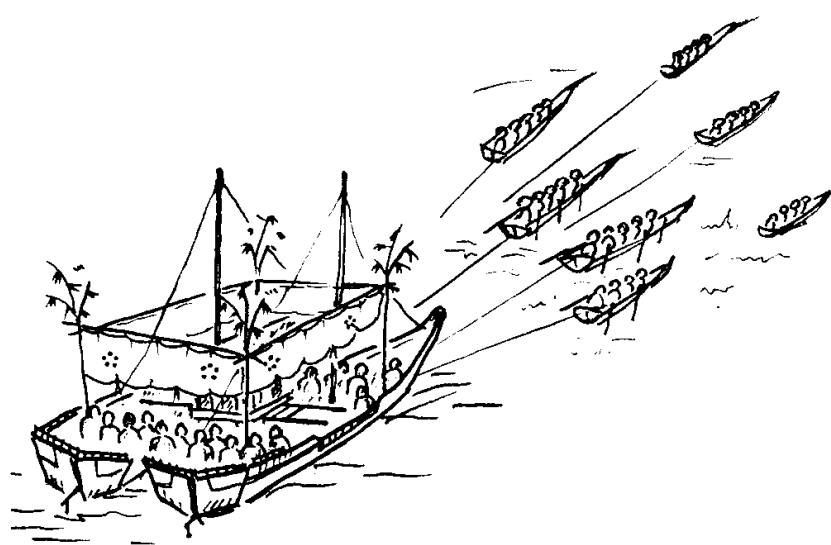
一方、まだ舗装もされていない時代の道路は、アセチレンガスの明りに照らし出された中で、もうもうと砂埃をあげ、その埃の中で、冷し飴が売られ、綿菓子を作られ、切り売りの西瓜が並べられたり、おもちゃ店があつたりと、所狭しと屋台が連なつて、子供達の購買欲をかき立てる。

御座船の発着所は松之江旅館の前、東浜方雁木である。（今は無いが、百万両及び港橋北詰付近にあつた）

御座船は帆船を横に二隻並べてつなぎ合せて床を造り、四隅に青竹を立ててしめ縄が張り巡らされ、梅鉢を打った幔幕で飾られた。

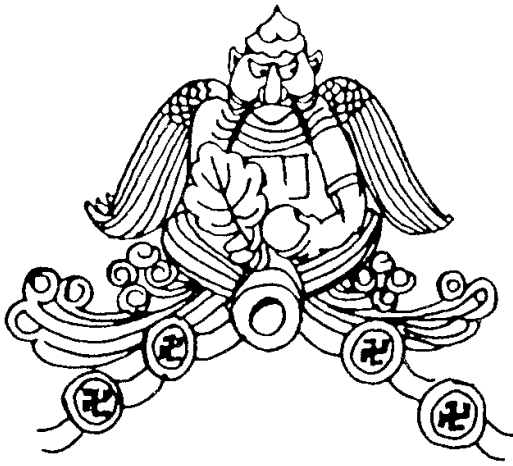
引船は小型漁船が七、八隻、八丁櫓を揃えて、赤禪に黄鉢巻をしめた若者が掛声も勇ましく漕出す。

最初の一巡は沙美津近くまで漕出し、次いで二巡めは八幡灯台付近まで、最後の三巡めは現玉島大橋付近までと、港内をくまなく三巡航するのが慣わしであつた。

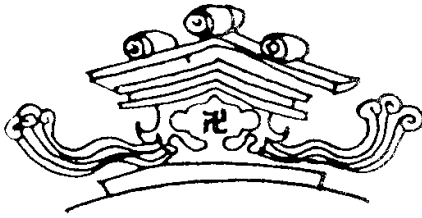


また、御座船に陪乗を許されたのは、神官・衆人をはじめ、氏子総代、天神講員で、いづれも衣冠束帯又は礼服用で折れ正しく、巖肅であることがたたく守られていた。

由緒ある海上渡御も、昭和三十年代後半には航海法の規制を受けて、止むなく陸上渡御となり、永い伝統的行事も姿を消すこととなった。



羽黒神社の
鬼瓦



補記(1)

羽黒山異聞

大へんがんじように造られたといわれる新町の堤防も、大雨になると里見川・道口川が氾濫して出水のたびごとに堰が切れて、魔の堤防として村人産は恐れていた。

そのうちに誰れいうとなく、「龍神様の怒りにふれたのだから、人柱を立てたら龍神様の怒りも治まるだろう」という噂が村中に広がった。

そこで村の役人衆が集まって相談したところ、「人柱には、横布を使った着物を着た者を龍神様の人身御供として捧げるとよい」ということになった。

そして村中をさがしたところ、お玉というお齒黒^{*}をつけた女に白羽の矢が立てられた。

一方、そのことを知ったお玉は、「村のため皆さんのためにお役にたつのならば、喜んで人柱に立ちましよう」といって、龍神に身を捧げた。

という。

それ以後、阿賀崎の地は沃野はくやとなり多くの人達が感謝するところとなって、村人達は、お齒黒のお玉を「お羽黒様」と称して、小さな祠を建てて祀ったという。

一説では、これが羽黒神社の起りであるとも伝えている。

※お齒黒……昔、女は結婚すれば齒を黒く染める風習があった。江戸時代に最も流行していた。



円通寺 金仏様

(青銅露坐地蔵菩薩坐像)
倉敷市重要文化財

補記(2)

円通寺の金仏様かなぶつさま

或る夜のこと、円通寺の境内にまつてある金仏様が、円

通寺六世こつせん元もと輒ついで和尚の夢枕に立って「熱い、熱い……水をくれ……」と叫ばれる。

和尚はこの夢にうながされて、真夜中に起き出して、寺男達を呼び集めて水を汲ませ、金仏に水をかけさせた。

金仏はまるで焼けてでもいるように、水をかけてもかけても、ジューンと湯煙をあげて蒸発するばかりで、なかなか冷えなかった。

ところが不思議なことに、それから数日の後、江戸から見知らぬ男が円通寺を尋ねて来た。

そして、

「先日の江戸の大火に際しては、このお寺の方々に大へんお世話になり、誠に有難うございました。」
という。

和尚には一向に心当りがなかったので、江戸

からの使者に念を押ししたが、江戸の使者は、「いやいや、ここのお寺の定紋に絶対間違いはございませぬ。火事の最中、定紋のついた高張提灯があらわれて、消火作業に大活躍して下さいましたのを、この目でちゃんとして見ております……し。」

という話に、和尚は二度びっくり。あの夜、金仏様が焼けたようになったのは、江戸の火事のためだったのだ……と知った。

このことがあってから、この金仏様を「火消し和尚」と呼び、あがめ奉つるようになったと伝えられている。

この金仏様※は、江戸時代の中頃、阿賀崎村の新町問屋西国屋萱谷半十郎が、京都の鑄造仏師藤原定延に造らせて寄進したものであると伝えられている。

また、江戸の大火とは、安永元年（一七六二）の目黒行人坂の大火と呼ばれているものことであらうか。

※金仏様

青銅露坐地藏菩薩坐像

（台座蓮弁の銘から）

無上廣而無極拳之無詞故無銘

（一七五八）年戊寅春正月二十四日

当山六代鏡元親發識主山興道信士

京都三条通 近藤播磨藤原定延作

願主 寿岳良長居士 栴風真閑大姉

西阿知の萱屋氏の分家で萱谷と称する家があった。

その分家の萱谷五郎左衛門（延宝五年没）の三男

萱谷半十郎正衆は享永三年（一七〇六）に阿賀崎村

新町に分家し海運

問屋西国屋を開業

した。

西国屋当主は

代々「半十郎」を

襲名したようである。

